

A close-up, high-contrast photograph of a red rose, serving as the background for the poster. The petals are layered and detailed, with a deep red color that transitions to black in the shadows.

Carmen x Aconcagua

横浜ゾリステン ～指揮者のいないオーケストラ～

2012年 5月1日(火)

横浜みなとみらい小ホール

開演 19:00 開場 18:30



Program

ヴィラ＝ロボス：ブラジル風バッハ第6番

アストル・ピアソラ：バンドネオン協奏曲「Aconcagua」

～ 休憩 ～

ビゼー：「カルメン」より

前奏曲

衛兵の交代

ハバネラ

セギディーリャ

アルカラの竜騎兵(第2幕への間奏曲)

闘牛士の歌

密輸入者の行進

夜想曲(ミカエラの Aria)

アラゴネーズ(第4幕への間奏曲)

ジプシーの踊り



本日はご多忙の折、横浜ゾリステン～指揮者のいないオーケストラ～公演にご来場くださり、誠にありがとうございます。団を代表し厚く御礼申し上げます。

横浜ゾリステンは2009年に結成された、プロフェッショナル・オーケストラです。同年11月にベートーヴェン「運命」でデビュー、翌年5月は「ブラームスプログラム」と「オーケストラを聴こう!」、11月は「イタリアプログラム」、そして昨年6月は「エロイカプログラム」、11月は「新世界プログラム」と既に6回の公演活動を続けて参りました。

本日のメインはビゼーのカルメンです。またピアソラのバンドネオン協奏曲「Aconcagua」、ヴィラ＝ロボスのブラジル風バッハ第6番、と情熱みなぎる音楽に挑戦いたします。皆様方に満足していただける音楽をお届けできるかどうか、是非お楽しみいただければ幸いです。

横浜ゾリステンは引き続き高度なアンサンブルによる質の高い音楽をお届けできるよう、今後も活動を進めてまいります。引き続きよろしくお願い申し上げます。

次回公演は平成24年12月26日(水)、鎌倉芸術館小ホールにて公演を行います。次回公演も合わせてよろしくお願いいたします。

横浜ゾリステン事務局長 住田英二

プログラム・ノート

エイトル・ヴィラニロボス (Heitor Villa-Lobos 1887年3月5日-1959年11月17日)

ヴィラニロボスは1887年、リオ・デ・ジャネイロに生まれた。彼に音楽の手ほどきをしたのは、アマチュア音楽家であった父親と叔母であった。特に叔母はJ.S. バッハの平均律クラヴィーア曲集を好んで弾いたと伝えられており、エイトルのその後の音楽に大きな影響を与えた。こうした家庭で、ピアノ、クラリネット、チェロを演奏することを学んだ彼は、1899年の父の死後、10代でカフェでチェロを弾いて生計を立てることとなった。1905年にはブラジル東北部に民謡の収集に出かけた。この後、彼はリオ・デ・ジャネイロの音楽院で学ぶが、アカデミックな態度とは常に一線を画していた。12曲の交響曲、17曲の弦楽四重奏曲といった古典的な形式によった作品から9曲の『ブラジル風バッハ』のような実験的な性格を持つ作品まで、実に1000曲近くに及ぶ膨大な作品を遺した作曲家である。

ブラジル風バッハ第6番 (1938年 フルートとファゴットのための作品)

原題は“Bachianas Brasileiras”。終生J.S. バッハを深く敬愛していたヴィラニロボスは、ブラジルの民俗音楽を素材にバッハが書いたような組曲を創作しようと試み、9曲の「ブラジル風バッハ」のシリーズを作曲した。その名の通り、ブラジルの民俗音楽素材に基づき変奏や対位法的処理が行われる充実した作品となっている。9曲は楽器編成が異なっているため、通して演奏されることは希であるが、ヴィラニロボスを代表する作品として、いずれも著名な作品である。

1923年にパリへ留学した彼は1930年までパリで暮らす。この間にアルトゥール・ルービンシュタインからエドガー・ヴァレーズにいたる幅広い音楽家・芸術家の喝采を得た。

1930年に帰国後は、リオ・デ・ジャネイロの音楽院の院長に就任し音楽院の教育課程を見直すと同時に、ブラジル音楽の真価を知らしめるべく、ブラジルの民俗音楽に根ざした作品を創作し、世界各地で演奏を行った。その音楽はパリをはじめ各地で大成功を収め、彼は20世紀を代表する作曲家の一人となったのであった。1959年、故郷リオ・デ・ジャネイロで72年の輝かしい人生を閉じた。

アストル・ピアソラ (Astor Piazzolla 1921年3月11日-1992年7月4日)

1921年、アルゼンチンのマル・デル・プラタにイタリア移民三世（イタリア系アルゼンチン人）の子として生まれる。四歳の時に一家でニューヨークに移住し、15歳までを過ごす。この頃既にジャズに親しんでいたが、当初はバンドネオンやタンゴへの興味は薄かったという。アルゼンチンに帰郷後、父の開いたレストランでバンドネオン、ハーモニカを演奏していたが、1938年にラジオで先鋭タンゴ「エルビーノ・バルダーロ楽団」に感動して初めてタンゴの音楽性を知る。1939年に当時最先端だったトロイコ楽団に参加し、バンドネオン奏者として徐々に頭角を表すようになる。また、1940年から5年間、アルベルト・ヒナスデラに師事して音楽理論を学ぶ。1944年にトロイコ楽団を脱退後、自らの楽団を率いて活動を開始、先鋭的なオーケストラ・タンゴを展開するが同時にタンゴの限界にも行き当たり、楽団を解体した後しばらく裏方活動に徹するようになった。なお古典的なタンゴの作・編曲やクラシック作品の製作はこの頃に集中している。

1954年、タンゴに限界を感じたピアソラはクラシックの作曲家を目指して渡仏し、パリでナディア・ブーランジェに師事する。当初自分のタンゴ奏者の経歴を隠していたが、ナディアにタンゴこそがピアソラ音楽の原点であることを指摘され、タンゴ革命の可能性に目覚める。

1955年7月に帰国後、エレキギターを取り入れたブエノスアイレス八重奏団を結成、前衛的な作風に保守的なタンゴファンから猛攻撃を受け「タンゴの破壊者」と罵られるほどだった。命を狙われたこともあったという。結果楽団としては成功せず、いくつかのアルバム録音を残した後に新天地を求めて家族で古巣のニューヨークに移住する。ニューヨークでは歌手の伴奏などを行ったほか、実験的なジャズ・タンゴと称する編成を組んだ。

バンドネオン、ヴァイオリン、ピアノ、コントラバス、エレキギターからなる五重奏団を結成し、以後ピアソラの標準的グループ構成となる。

バンドネオン協奏曲「Aconcagua」～アコンカグア～

ピアソラのタンゴは、正統派のタンゴとは違い、舞踏的要素がほとんどない「音楽」としてのタンゴであり 1 楽章はタンゴのリズムを用いている。

その情熱的な律動は、舞踏ではなく、人間の心と体を揺さぶり動かすような「音楽」だ。

2 楽章はアンダンテ、叙情的なバンドネオンの音色はブエノスアイレスの街中や、あるいは、静かな山「アコンカグア」を想わせる。

3 楽章でもタンゴ風のリズムが現れる。

よりポップスに近いおしゃれな旋律と、現代音楽のようなおぞましい雰囲気とが交差して現れる。

随所で見られるバンドネオンのカデンツァは見どころだ。バンドネオンの情熱的な魅力がたっぷり味わえるクラシカルな作品は少ないし、またピアソラの作品のほとんどはクラシック音楽とも言い難い。だがこれは、伝統的なクラシックという世界と、情熱と哀愁のピアソラ・タンゴの、まさに出会いと言える音楽だ。

♪ バンドネオンてどんな楽器？

アコーディオンに形が似ているため（同じ蛇腹楽器）、「アコーディオンの一種」という説明も見受けられるが、鍵盤はピアノのような形ではなくボタン型で、これが蛇腹を挟んで両側についている。アコーディオンが 1820 年代に発明され、改良して作られたアコーディオンの一種であるコンツェルティーナ（コンサーティーナ）の影響を受けて 1840 年代、ドイツのハインリヒ・バンド Heinrich Band が 1847 年に考案した。野外での教会の儀式でパイプオルガンの代用に使うなど、ドイツの民俗音楽で使用されていた。



基本的なバンドネオン（ダイアトニック型）は、蛇腹を押すときと引くときで別の音が出る。音階配置がほぼ不規則といった独特の構造を持つ。これは発展途上で不足した音階を建て増した歴史に理由があるようだ。中央のボタンは、隣同士の特定のボタンを同時に押すと（ダイアトニック・コンサーティーナや、アコーディオンの左手と同じように）和音が鳴っている。蛇腹を引いたときの方が音が響く。蛇腹によく共鳴するためだと言われる。従ってバンドネオン奏者は蛇腹を引く音を多用し、蛇腹を引いて演奏しては空気抜きレバーを押しながら蛇腹を戻すということを繰り返すことが多い。特にタンゴの鋭いスタッカートは、膝を使いながら蛇腹を瞬時に引くことによって出される。非常に難しいことから「悪魔が発明した楽器」と呼ばれる。

ジョルジュ・ビゼー（Georges Bizet 1838年10月25日 - 1875年6月3日）

ジョルジュ・ビゼーは 1838 年、フランス・パリに生まれた。最初につけられた名前は、アレクサンドル＝セザール＝レオポール・ビゼー (Alexandre-César-Léopold Bizet) だったが、洗礼時に改名された。

父は音楽教師、母はピアニストで、幼い頃から音楽に親しみ、記憶力が抜群であった。9 歳でパリ音楽院に入学し、フランソワ・マルモンテル、シャルル・グノー、ユダヤ人ジャック・アレヴィらに師事してピアノ、ソルフェージュ、オルガン、フーガで一等賞を獲得した。19 歳でカンタータ『クローヴィスとクロティルデ』でローマ大賞を獲得。1861 年にはリストの新作（リストは、「この曲を正確に弾けるのは私とハンス・フォン・ビューローだけ。」と豪語していた。）のパッセージを一度聴いただけで演奏し、さらに楽譜を渡されると完璧に弾いてのけてリストを驚かせた。この時、リストは「私は間違っていた。3 人というべきでした。正確に言えば、最も若いあなたが最も奔放で輝かしいというべきでしょう。」とビゼーを賞賛した。しかし、オペラ作家としての成功を夢見ていたビゼーは、ピアニストになることを目標とはしなかった。

歌劇などの劇音楽を作曲の中心とし、25 歳のときの歌劇『真珠採り』でオペラ作曲家の地位を確立する。その後フランス人の作家アルフォンス・ドーデの劇『アルルの女』の付随音楽や、歌劇『カルメン』などを作曲したが、1875 年 3 月にパリのオペラ＝コミック座で行われた『カルメン』の初演は、ヒロイン（カルメン）が女性労働者だったこともあり失敗に終わった。ヒロインの声域をそれまでに一般的だったソプラノではなくメゾソプラノに設定したことも新しさの一つだった。

1869 年にビゼーは師アレヴィの娘であるジュヌヴィエヴ・アレヴィと結婚するが、『カルメン』初演の約 3 か月後である 1875 年 6 月 3 日、敗血症のため、わずか 36 歳 7 ヶ月の若さで世を去ったが、後にビゼーの音楽は世界的に認められるようになった。

オペラ「カルメン」のあらすじ

第1幕

セビリアの煙草工場でジブシーの女工カルメンは喧嘩騒ぎを起こし牢に送られることになった。しかし護送を命じられた伍長ドン・ホセは、カルメンに誘惑されて彼女を逃がす。パスティアの酒場で落ち合おうといい残してカルメンは去る。

第2幕

カルメンの色香に迷ったドン・ホセは、婚約者ミカエラを振り切ってカルメンと会うが、上司との諍いのため密輸をするジブシーの群れに身を投じる。しかし、そのときすでにカルメンの心は闘牛士エスカミーリョに移っていた。

第3幕

冒頭で、ジブシーの女たちがカードで占いをする。カルメンが占いをする、不吉な占いが出て結末を暗示する。密輸の見張りをするドン・ホセを婚約者ミカエラが説得しに来る。闘牛士エスカミーリョもやってきて、ドン・ホセと決闘になる。騒ぎが収まった後、思い直すように勧めるミカエラを無視するドン・ホセに、ミカエラは切ない気持ちを一人独白する。カルメンの心を繋ぎとめようとするドン・ホセだが、カルメンの心は完全に離れていた。ミカエラから母の危篤を聞き、ドン・ホセはカルメンに心を残しつつ、盗賊団を去る。

第4幕

闘牛場の前にエスカミーリョとその恋人になっているカルメンが現れる。エスカミーリョが闘牛場に入った後、1人でいるカルメンの前にドン・ホセが現れ、復縁を迫る。復縁しなければ殺すと脅すドン・ホセに対して、カルメンはそれならば殺すがいいと言い放ち、逆上したドン・ホセがカルメンを刺し殺す。

ハバネラとは

ハバネラは1791年のハイチ革命における避難民によってハイチからキューバにもたらされた、フランスのコントルダンスに源流がある。最初に「ハバナ風コントルダンス contradanza habanera」と呼ばれたのは、1836年に出版された曲集に収録された、作者不明の《胡椒 La Pimienta》である。コントラダンスから発展して革新されたのは、スペインやアフリカの民俗音楽に影響されたリズムにあった。

ハバネラのリズムは船乗りによってスペインに輸入され、19世紀末までに非常に人気の舞曲となり、スペインの作曲家イラディエルは国内だけでなくアメリカ合衆国でも大成功を収めて、国際的なハバネラ・ブームに火を点けた。《ラ・パロマ La Paloma》は特に有名である。特にイングランドやフランスのサロンで大流行となる。

そのため多くの当時を代表するフランス音楽の作曲家もこぞってこの「ハバネラ」を作品に取り込んでいる。マスネは歌劇《ル・シッド Le Cid》（1885年）のバレエの場面に色を添えるために、ハバネラを利用している。今日お聴きいただく、ビゼーの《カルメン》の中でカルメンが歌う有名な独唱曲「ハバネラ」（恋は野の鳥）や、サン＝サーンスのヴァイオリン曲《ハバネラ》作品83のほか、ラヴェルは《ハバネラ形式の小品》や、《スペイン狂詩曲》の第3曲（原曲は4手ピアノ曲《耳で聴く風景》の第2曲）にハバネラを使ったほか、《ヴォカリーズ練習曲》にハバネラのリズムを利用している。

ちなみにビゼーの「ハバネラ」（恋は野の鳥）は、イラディエルのハバネラ《El Arreglito》の転用という説は有名である。

ハバネラはフラメンコと混ざり合ってアルゼンチンに上陸し、タンゴのルーツにもなった。

横浜ゾリステン〜コンサートマスター・ソリスト・メンバー



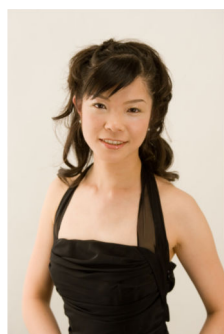
水村 浩司（コンサートマスター）

第50、55回全日本学生音楽コンクール名古屋大会第1位。東京藝術大学音楽学部器楽科及び同大学大学院修士課程卒業。これまでに北垣紀子、故久保田良作、澤和樹、山口裕之、松原勝也の各氏に師事。大学在学中から東京シティフィルハーモニックその他数々のオーケストラとヴァイオリン協奏曲を共演する。オーケストラ奏者としても名古屋フィルハーモニー交響楽団のゲストアシストコンサートマスターをつとめ、2011年には全日本選抜ユースオーケストラのゲストコンサートマスターとしてウィーン国立オペラ座で公演。横浜ゾリステンコンサートマスター、東京室内管弦楽団首席奏者、クライネスコンツェルトハウス弦楽四重奏団メンバー。



仁詩（バンドネオン）

大阪音楽大学短期大学部ジャズ専攻卒業。バンドネオンを門奈紀生氏に師事。09年夏、ブエノスアイレスの老舗ミロンガ「サロン・カニング」での演奏をはじめとして、多くのステージにて演奏。また同年夏のタンゴフェスティバルに出演、好評を博す。ブエノスアイレスにて、バンドネオンをカルロス・パソ、ネストル・マルコーニ、ロベルト・アルバレス各氏に師事。05年より吉田正記念オーケストラのタンゴ公演でのソリストを務め、日本各地でのコンサートやタンゴアルバム3〜7のレコーディングに参加。09年春、自身の1stCD「DIVERSION」を発表。2011年には韓国最大のタンゴダンスコミュニティ「solo tango」から招聘を受け、ソウル各地にてツアーを行う。現在、バンドネオンの更なるアプローチを模索し、東京を拠点に日本各地において、自身のグループを率い独自の活動を展開中。



浅井由紀（ピアノ）

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。イタリアの国立トリノ・G・ヴェルディ音楽院を首席で卒業。在学中にトリノ音楽院オーケストラと協演。他、トリノ、リヴォリ、ランボレッキオなどイタリア各地でリサイタルを行い、好評を博す。1997年安川加寿子記念コンクール入選、2003年G・ロスピリオージコンクール第2位、2004年ラッコニージ国際音楽コンクール ピアノ部門第2位、室内楽部門第3位など多数受賞。今までに、飯岡香子、秦はるひ、安川加壽子、オスカル・アレッシー、レモ・レモリの各氏に師事。現在、室内楽やソリストとして、近年ではクラシックに留まらず、ジャンルの幅を広げて活動している。

♪ヴァイオリン 1st

水村 浩司
東山 加奈子
坂元 愛由子
梶川 空飛亜
荒巻 美沙子
佐藤 恵梨奈

♪ヴァイオリン 2nd

土谷 茉莉子
田島 華乃
粟津 惇
井神 麻友子
竹ノ内 悠
田代 藍

♪ヴィオラ

舘泉 礼一
北村 聡至
山口 真
野尻 弥史矢

♪チェロ

関口 将史
苅田 鉄平
山田 健史
水野 須美子
和田 理

♪コントラバス

吉本 宗司
早川 珠実
吉田 水子

♪フルート

長崎 亜星
美島 美與

♪オーボエ

崎本 絵里菜
小倉 悠樹

♪クラリネット

木原 亜土
宮前 和美

♪ファゴット

河崎 聡
広幡 敦子

♪ティンパニ

池上 秀太

♪ホルン

内田 隆太郎
安田 健太
大出 佳子
山田 愛

♪トランペット

金城 和美
原 育海

♪トロンボーン

覚張 俊介
武石 拓海
大門 昇平

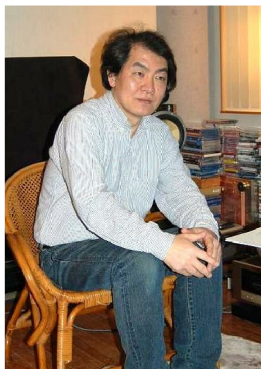
♪チューバ

森永 卓

♪パーカッション

久保 杏
三神 絵里子
小島 快

🎵 団員直撃インタビュー (聞き手：山之内 正、ファゴット奏者：河崎 聡)



山之内 正

－ 《ブラジル風バッハ》の第6番はフルートとファゴットのデュエットです。

河崎：珍しい組み合わせですが、完全に2声に分かれて平等に進行する対位的な構成が、まさにこの曲のスタイルに合っているんです。これがクラリネットとファゴットやオーボエとファゴットのようにリード楽器同士だと音域が近付いた瞬間に音が混ざってしまうので、曲が求める響きとは変わってくるかもしれません。

－ 聴きどころはそこですね。

河崎：そうですね。2本が別のことをやりながらも、きちんと噛み合っているかどうか。それからフルートが超絶技巧なので、フルートの腕前ですね、当然そこにフォーカスが合います。

－ プレッシャーかけてますね(笑) ファゴットパートの難しさはどこにありますか？

河崎：ハイトーンが続くわけでもなく、音域もこの楽器に合っていますが、音域が上下すると逆にコントロールが求められるので、そこが難しいところです。

－ 2つの楽章に分かれています。

河崎：前半のラルゴは、僕の考えではこれこそバッハらしい、対位的によく書かれた曲だと思います。後半のファンタジーは紡ぎ合って作っていくというよりは、いろいろなイメージが次々に入れ替わるような場面がたくさんあるので、まったく違う曲が2つあると思っていただい方がいいかもしれません。ちなみに元の曲名は「バッキアナス・ブラジリアス」なので、本来は「バッハ風、ブラジル風」なんです。「ブラジル風のバッハ」、ではなくてブラジル風とバッハ風が並列になっています。バッハを真似てヴィラ＝ロボスが民族色のある曲を書いたと思われがちなんですけど、そうではない。バッハ的な対位法が色濃く出ていると同時に、音列としてはブラジルの民族色があり、リズムも4：3とか2：3とかポリリズム中心に組み立てられている点、この曲については重要なんです。日本語の曲名は少し違和感があるんですね。どうしてもバッハの印象が強くなって、先入観を持ってしまいやすい。でも中身は紛れもなくヴィラ＝ロボスの曲なんです。彼がブラジル風、バッハ風に味付けしたといえいいでしょうか。

－ なるほど、味付けというのはわかりやすい。ところで、そもそもなぜファゴットを吹き始めたんですか？

河崎：中学校の吹奏楽部で始めたんですが、ほかの部員よりも1週間遅れて入ったら、これしか残っていなかった(笑)。顧問の先生から「君は手が大きいから向いている」とか言われたり・・・、こじつけですよ(笑)。でもやっていくうちに好きになっちゃって。

－ どんなところが気に入ったんですか？

河崎：ダサいところですね(笑)、楽器が不器用なんです。いろんなことができるとはいえ、サクソとかフルートに比べると明らかに可能性は低いし、音域も低いから目立たず、音も地味。そこがじっくり来る感じで気に入りました。

－ 普通とは逆ですよ。

河崎：そうですね、でも逆にこれで目立ちたいというのもあるんです。

－ 低音楽器の面白さはどこにあると思いますか？

河崎：音楽のベースになる音をつねに出していることですね。特にセカンドの場合、木管楽器全体が一番下にいて、自分が全部支えているという状態が気持ちいいんです。チェロやコントラバスと一緒にオーケストラを下から支えることが楽しいし、コードが進行するときに根音がきちんと動いていくことはとても重要で、その仕事をするのが面白いんです。

－ 今回のプログラム全体での聴きどころはどこでしょう？

河崎：曲の編成が全部違ううえにそれぞれ異なるキャラクターを持っていますが、最後まで聴き終えたとき、スペインやラテンの雰囲気浸っていたらいいと思います。

<山之内正プロフィール>

東京都立大学理学部卒業、出版社勤務を経てオーディオ、音楽の両分野での執筆活動に専念。Audio Accessory、AV Review、STEREO、レコード芸術、Mostly Classicなどに執筆中。著書：『インターネットで変わる音楽作業』(アスキー)、『はじめて楽しむホームシアター』(光文社)。



河崎 聡



音楽スタジオ NEW OPEN



アコースティック楽器専用
個人練習やレッスンに最適

150円/15分～
武蔵小杉駅から徒歩1分

スタジオアイシャ

s-aisya.com

044-872-7844



高価買取

ピアノ・エレクトーン



電話での査定
↓
出張査定無料
↓
即日現金で買取
↓
引き取り致します

楽器総合販売・調律・移動・修理・廃棄処分etc...
特選中古販売 ヤマハピアノ・エレクトーン・デジタルピアノ

●新品各社デジタルピアノ取扱い ●在庫多数有・格安にて販売中!!



お持ちのピアノに消音機取付致します

ヤマハ特約店 鍵盤楽器公正取引協議会会員

(株) スミノ楽器店

0120-76-5516

☎(044)411-5516(代) 川崎市中原区木月3-10-3 (P有り)
東横線・元住吉駅下車徒歩7分

当社ホームページ

<http://www.sumino-gakki.com/>

いい楽器みつけた!

はじめての人からプロフェッショナルまで
管楽器は **YOKOHAMA セントラル**

MUSICAL INSTRUMENTS CO., LTD.
CENTRAL

金管マウスピース他
チューバ専用フロア

気になる楽器・
欲しい楽器が
きっと見つかる!

セントラル楽器本館

セントラルの店

セントラル楽器

セントラル楽器本館

東急東横線
「東白楽」駅
徒歩1分
JR「東神奈川」駅
徒歩4分

セントラルの店

セントラル楽器本館

情報満載

ホームページ

<http://central-gakki.jp>

E-mail: web@central-gakki.jp

毎日新鮮な情報に更新中!

ぜひアクセスしてみてください!

ヤマハ・サンキョウ・ヤマギサワ等、国産の一流ブランドから、
ヨーロッパ・アメリカの超一流ブランドまで、すべてがそろった
管楽器の専門店

株式会社 セントラル楽器

〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川1-15-2

TEL.045-324-3111(代) FAX.045-324-4025